「……っ、」

少年が息を詰めると、ジャラ、と鎖の音が響きわたる。

部屋とも呼べない独房のようなそこは四方が石造りで、天井ばかりが高い空間だった。少年はそのはるか頭上から垂らされた鎖に裸で首を繋がれていた。鎖には長さにゆとりがあり苦しくはないが、このせいで背後のドアから逃げ出す自由を奪われ、そもそも安易に振り向くこともできない体勢だった。

足元にある正方形の床は一辺が大人の歩幅ひとつ分くらいで、中央に簡素な排水溝があるのみだ。右も左も上も下も、灰色の空間。そこに全裸で立たされたまま座ることもできず、少年は朝から日の暮れるまでを過ごすのだ。

「……、」

少年はまた息を詰める。
食事は日に三度与えられ、その間だけは鎖の長さを調整され座ることを許される。けれどその食事中ですら、この狭い空間から出ることは一切禁じられている。
それは当然排泄もこの場で行わなければならないということを意味していた。
陶器のような白い肌がしっとりと汗で湿っている。綺麗に切り揃えられることの無くなった長い黒髪の下で、長い睫毛に縁取られた大きな瞳が伏せられていた。

尻孔のすぐそばまで降りてくる塊(かたまり)の気配。少年の少し開いた両脚が、次第にがくがくと震えはじめる。少年は目の前の壁に手をついたまま、薄く白い腹を喘がせた。

「……ふ、……ぅ…っつ、」

下腹に力を込めるといよいよ固形物が肉環を拓きせり出してくる。むりっ、という下品な音が少年の耳を冒した。
立ったままの排泄に躰は慣れていても、気持ちは追いつけないままだった。この空間に日中入れられるようになってから、もう一ヶ月経つ。

「ぅ……、」

湿り気を帯びた塊が少年の肉環から産み出され、ことん、と音を立て足元の床に落下する。一度収斂(しゅうれん)した後孔だったが、そこは次なる固形物をひりだすため再びひくひくと開閉を繰り返した。やがて窄まりの中心から新たな塊が顔を出し、むりっ、と少年の肉環を拡げ、尻尾のように長く影を伸ばす。

「ひ……、ぅ…、」

長物をひりだしながら、少年の脚はより一層がくがくと震えている。

その震えが単に排泄のいきみのためだけであったなら、どんなに良かっただろう。少年はそう思わずにいられない。尻孔のなかはここ最近の調教により、すっかり敏感になっていた。僅かな刺激にも内壁が淫らな快感を拾い上げ、少年の幼い躰を昂(たかぶ)らせた。

伏せた視界に己の幼茎が起(た)ち上がるのが見える。内壁を擦られる感覚に腰までもがわなないている。震える白い両太腿の中心を、尻尾の陰はなおもゆっくりゆっくり伸びていった。こんなことに快感を覚えるようになってしまった自分の躰に浅ましさを覚えつつ、少年の頭は今日も恍惚に蕩(とろ)けていく――。そのときだった。

ガチャ、

と背後のドアが唐突に開(あ)いた。

排泄の最中だった少年の肩がびくりと小さく跳ねる。

鍵が閉まっていない背後のドアが開かれるのは、いつだって唐突だ。

「おーおー、今日も一人で気持ちよくなってやがるなぁ？」

意地悪く背後からかけられる中年男の声。

振り向くことができずとも、そのいやらしい視線が塊をひりだす後孔に注がれていることは想像に難(かた)くない。

パタン、と音がする。男は後ろ手にドアを閉めたらしい。

「おら、さっさとひりだせよ。孔が使えねぇじゃねぇか」

「ぁ……、も…、申し訳ございませ……っ、ぁあ……っ！」

謝りかけた少年の尻たぶを、男が両側から掴みあげる。
固形物を産み出す肉環が丸見えになるように、双丘の根元を親指できつく押し拡げられ、少年の下腹に込めていた力がひるむ。

「おら！休むなっ。俺に汚いもんひりだしながら気持ちよくなってるとこじっくり見せろっつってんだ」

そう言うと男は少年の方尻をぱしんと叩いた。
それほど痛く打たれたわけではないのに、排泄の快感とも相まって少年の腰は大袈裟なほど跳ね上がった。
はやく腹の中のものを出し切らなければもっと酷い仕打ちを受けそうで、少年は汗ばむ下腹にもう一度力を込める。

「ぁ……、ぁあぁ……っ、ぅ、♡」

むりむりっ、と立て続けに音がすると同時に内壁が擦られ上擦った声が漏れてしまう。

こんなの恥ずかしすぎる。躰は玩具(がんぐ)扱いされることを覚えても、痴態を見られる羞恥にだけはどうしても慣れることができない。しかし与えられた命令は絶対だ。少年は快感と凄まじい羞恥に顔を紅潮させながら、とうとう塊の切れ目を出し切った。男に開かれた双丘の中心から長い塊は落ちて、足元でぼと、と音を響かせた。最後の瞬間固形物が媚壁を強く擦り上げ、肉環を大きく拡げ出ていく感覚に少年は打ち震えた――。

「ふん。とんだ変態さんだなぁ？こんなことで感じる躰になっちまってよ」

男が後ろで屈む気配がする。

「ここの清掃も俺らの仕事ってことになってるから、床は綺麗に片付けておいてやるよ。ありがたく思うんだな」

いつもこの瞬間がいちばん恥ずかしい。我ながらこんな状態でよく心が折れないものだと思う。少年は幼いとはいえ、もう赤子ではないのだ。自らの排泄物を他人に見られ拾われるだなんて、まるで飼われた動物のようだ。しかも今日は排泄しているところまで見られてしまった。

「ん？なんだ。泣いてるのか？」

男は備え付けのシャワーの蛇口を捻りながら、少年の顔を覗き込んでくる。

耳まで紅潮しきった少年の顔。伏せられた長い睫毛の間から、新しい雫が次々盛り上がってくる。細い肩が小刻みに震えていた。

「心配すんなよ。こっちだって嫌々やってるわけじゃねぇんだ。いいことを教えてやろうか？」

男が床を洗い流す、ザーッという音が響きわたる。少年の裸足の裏を冷たい水が浸していく。

「お前は一ヶ月前までこの屋敷の主人の寵童（ちょうどう）だったからな。裏の界隈じゃ有名だぞ。物凄い美童だってな。だからお前の躰から出されたもんってのは、そりゃぁ高値で売れるんだぜ」

「……っ！」

少年が細い肢体をびくりと震わせたのは、話の内容に驚いたからというだけではなかった。男は厚みのあるしわがれた手を少年の細腰にかけてくる。

「お前もついでに洗ってやるよ」

「！ぁあぁ……っ♡！？、」

唐突にシャワーヘッドを後孔に近づけられ、勢いのよい水圧をやわらかい粘膜に受ける。

「ちゃんと奥まで洗ってやらんとなぁ？」

「っひ……♡、」

ぬぷ、と太い指が肉環を割って入り込んできた。かと思えば、ぐい、と孔を拡げるように指をかぎ状に曲げられる。拡がった孔から冷たい水の圧が容赦なく注ぎこまれた。

「ぃ…っ、ぁあぁああ……っっ♡♡♡、」

排泄し終えたばかりの少年のそこはいつにも増して敏感で、媚壁に水を当てられるたび腰が淫らに跳ね上がる。

「おいおい、そんな興奮するなよ。ちゃんと洗ってやるからよ」

男は水に濡れた孔のなか、指をまっすぐにするとそのまま抜き差しをはじめる。

「っあ、やめ……っ、」

指の動きは徐々に速さを増して少年を苛(さいな)む。
シャワーの水音に紛れじゅぽじゅぽと音が上がりはじめる程烈(はげ)しく責め立てられ、少年は腰をわななかせた。

「悲観すんなよ。ここにお前が来てくれたおかげで俺らは性欲発散できるわ、お前の出したもん集めて小遣い稼ぎできるわ、大助かりなんだ。お前だってあの主人に毎晩抱きつぶされるよりか、こっちのほうが良かったんじゃねぇの？」

指は二本に増やされ、ますます烈しく少年のなかを擦り上げてくる。

「ひぁ…っ、いやっ…！♡いや″ぁああ……っっ！♡♡♡♡」

少年がこの館に貰われてきたのは2ヶ月前のことだった。館の主人は小姓(こしょう)と称し侍らせた少年を、自らの性的欲望を満たすための奴隷として扱うことで有名だった。主人の食指は常に留(とど)まることを知らず、館には次から次へと新しい小姓がやってくる。純真な少年たちは主人の手に穢され、玩具のように扱われ、飽きられれば「使用人たちの共有玩具」となった。
「使用人たちの共有玩具」は館の隅に設(しつら)えられたこの空間に繋がれ、使用人た

ちの好きなタイミングで躰を弄(もてあそ)ばれる――。

「っぁあぁぁああ……っっ！♡♡♡♡、」

じゅぽじゅぽじゅぽじゅぽ……っ

揃えた二本の指を唐突に奥まで突き込まれ、掻きまわされる。孔の奥が燃え立った。

「そんないやらしい声あげやがってよぉ……。よっぽど尻孔穿(ほじ)られるのが好きなんだなぁ？」

シャワーの水が止められ男の指が抜き去られた後も、孔のなかは快感の波が引かない。少年は濡れた白い尻を突き出すような格好で、下半身をがたがたと震わせていた。

「こんなに震えて可哀想になぁ？」

うなじに這わされる下卑た声。と同時に濡れた腰骨を両側からがっちりと掴まれて、悲鳴を上げそうになる。

「お望み通り俺のをなかに挿れて、ぐちゃぐちゃになるまで掻き混ぜてやるよ」

耳元でねっとりと囁かれた声に、気持ち悪さよりも期待感を感じてしまう自分の躰が信じられない。

「と、その前に」

男は不意に少年から身を離すと、背後で何かを取り出している。

「せっかく掃除したばかりだからな。また汚すの勿体ねぇし」

「？……っっ！、」

少年の幼い茎を男は、格子状に組まれた黒い革で覆った。竿の根元で頑丈そうな金具がカチッと締(し)められる。

「貞操(これ)帯つけたまま犯してやるよ。射精せずに達(い)くの、得意だったよなぁ？」

少年の丸い目が恐怖に見開かれている。男はくつくつと笑った。
欲に湿った息が首筋にかかり、少年の背筋をぞっとしたものが駆け上がる。

「ぃ……っ、ぃやぁあぁぁ……！こ、これは……これだけは…ゆるして……ぇっ、」